

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和3年3月15日

グループ名	なかとみ	フリガナ 代表者氏名	加藤 トシ 金高 俊哉
学校名 (代表者)	大田区立中富小学校	電話番号	03-3762-6756
研究テーマ	「自己肯定感の高い児童」の育成 ～わかる授業を目指し、指導方法の工夫～		
研究期間	令和2年4月1日 から 令和3年3月31日 まで		
研究結果 の概要 ※詳細は別 紙により 報告	<p>1 研究の概要</p> <p>(1) 研究テーマ「自己肯定感の高い児童」の育成 サブテーマ 「わかる授業を目指し、指導方法の工夫」</p> <p>(2) 研究の進め方 今年度は、コロナ禍ということもあり、一つの授業を全員で見合うということが、できづらかった。そこで、分科会ごとに研究を進め、アセスメントを通して、児童の実態把握をすると共に児童に学ぶ楽しさやできる喜びを味わわせることで、自己肯定感の高い児童を育成することをねらった。</p> <p>(3) 研究の内容 ①実態把握（アセスメント） 「低学年分科会」・「中学年分科会」・「高学年分科会」の3つで編成された分科会で、児童の発達段階に合わせて年間を通して、アセスメントを実施した。その結果から、児童の実態を分析し、指導法を工夫することで主題に迫っていくこととした。</p> <p>②全体研究会 指導力の向上を目指すために、全体研究会の機会を設けるようにした。専門性のある講師を招いて、研究を深めた。</p> <p>(4) 成果と課題 ①成果 成果としては、語彙に関するアセスメントや活動に継続的に取り組み、表現する機会を増やすことで、徐々にではあるが、児童が意識的に読んだり書いたりできるようになってきた。</p> <p>②課題 課題としては、低学年では、たくさんの言葉に触れ、語彙を増やすこと、中学年では、基本的な言語理解（拗音、促音、助詞等）の習得・表現、高学年では、長文を最後まで読み、構成を捉えて要旨を把握する力が不足していること等が挙げられる。</p>		
その他 特記事項			

1 研究テーマ

「自己肯定感の高い児童」の育成

～わかる授業を目指し、指導方法の工夫～

2 研究テーマ設定の理由

指導する児童は、各種調査結果から、自己肯定感が、低いことが伺える。様々な要因が考えられるが、大きな要因の一つとして、基礎学力が十分に身に付いていないために、自分の学力に自信がもてず、それ故、自己肯定感も学年が上がるについて低くなっていることが推察される。

この実態を踏まえ、各種アセスメントを継続的に行うことで、児童の躓きの原因を明らかにすると共に、授業を工夫し、児童に学ぶ楽しさやできる喜びを味わわせることで、自己肯定感の高い児童を育成することとした。

3 研究の基本的な考え方

研究のサブテーマとして、「わかる授業を目指し、指導方法の工夫」を設定し、以下のように研究を進めていく。

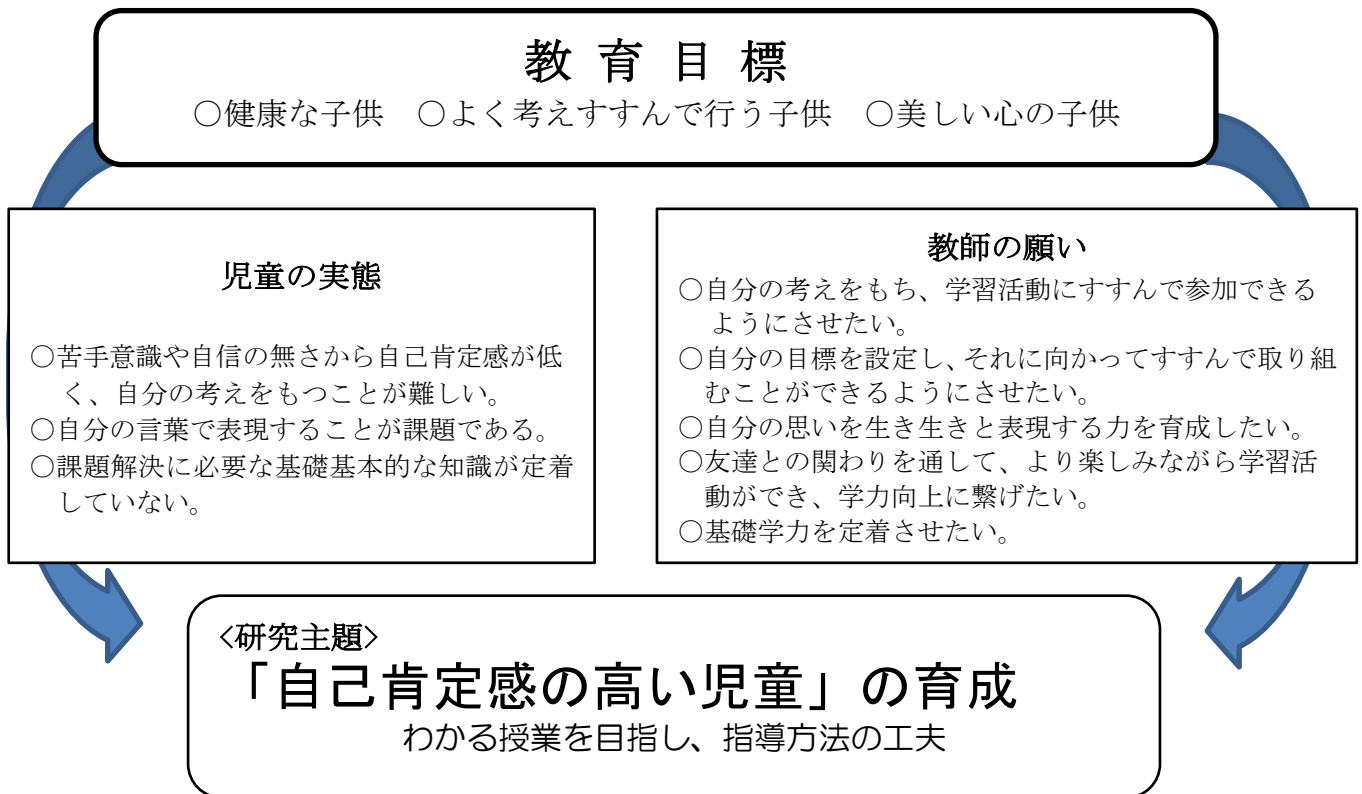
(1) アセスメントを行い児童の実態把握をする

各種の調査結果から、どの学年も目標値に達していない教科が多い。児童が、どこで躓いているのか、どのような力が不足しているのかを探るために、低・中・高の分科会で、年間を通して、アセスメントを実施し、児童の実態把握に努めた。また、全校一斉のアセスメントも行い、全校的な傾向をつかむようにした。

(2) 「わかった、できた」を実感させるための指導方法の工夫

児童が「授業は楽しい」と思うようになれば、学習意欲が向上し、すすんで学ぶようになると思われる。その結果、知識や理解が深まり、「わかった。できた。」と実感する経験も増え、新しい課題を自分の力で解決しようという気持ちも生まれてくる。教師はそうした児童の活動を適切に見取り、十分に時間を取って一人一人の課題解決に必要な声掛けや、資料提示などを行い、自力で課題解決できるように支援することが重要である。また、努力の結果が確実な達成感につながることで、授業での取り組みによって、できなかったことができるようになったという喜びを味わうことが、自己肯定感や自信につながると思われる。

4 研究構想図



今年度は、語彙力に関する児童の実態を把握する。課題改善のための取り組みを実践してもよい。（ステップ学習の時間を活用する。）

今年度の基礎研究を土台として、来年度目指す児童像やどのような研究にとりくむかを検討する。

- ・実態把握の方法…「MIM（ミム）」、「読解力を育む」等の活用。

具体的な活動

- ・全学年で児童の語彙力を高める教材に取り組む。
- ・全学年の教室に「言葉の宝箱」ポスターを掲示する。
- ・国語の学習を通して、自分の思いや考えを伝え合うコミュニケーション能力を高めるよう系統的に指導する。（可能な限り）
- ・明確な課題をもたせ、見通しを持って活動させる。
- ・児童に自信を付けさせるために、準備の時間を十分にとり、練習する時間を確保する。
- ・ワークシートやポイントカードを活用することで、自己評価・相互評価をしやすいようにする。また、評価するときには、良いところを見付けることに重点を置く。

5 分科会報告

低学年分科会

1年生

1 実施したこと

朝のステップ学習の時間を活用し、基本的な言語能力を高めるための学習に取り組んだ。毎週、長音、促音、拗音の読み書きの練習をし、月1回MIM-PMを行い、定着の様子を見取ってきた。また、しりとりやことば集め、読書など、言葉に触れる機会を多く作った。音読は、日々の家庭学習として行った。

2 児童の実態

ひらがなの読み書きがなかなか定着しない。促音や拗音の読みは、8割程度の児童ができるようになっているが、正しく表記できる児童は全体の6割ほどである。MIM-PMの結果を見ると、数値は上がってきているが、多くの児童が、支援を必要とする値となっている。

また語彙が乏しいからか、担任が指示したことや、テストなどの問題の意味が理解できない児童が多い。

3 課題（成果）

少しずつではあるが、長音、促音、拗音の読み書きができるようになっている。言葉単体の時は読めても、文章の中で流暢に読める児童は少ないので、文章の中で正しく読めるようにすることが課題である。また、いろいろな言葉に触れ、語彙を増やすことも課題である。

2年生

1 実施したこと

朝のステップ学習の時間を活用し、基本的な言語能力を確かめるため、MIM-PMに取り組んだ。他にも、基本的な読む力を鍛えるために、毎日、初見の読み物を音読する活動を取り入れた。その際に、簡単な言葉の意味について話し合ったり、読み物に対する感想を伝え合ったりする活動も取り入れた。

2 児童の実態

月に一度、計6回のMIM-PMのアセスメントを行った。1回目の結果で1stステージ・2ndステージに達していた児童は、24人中4人であった。3rdステージを下回っていた児童は、15人と半数以上もいた。1回目と6回目を比較してみると、1stステージ・2ndステージに達していた児童は、4名から6名に増加し、3rdステージを下回っていた児童は、15人と変わらなかった。一人一人の結果を見ると、1回目から6回目までゆるやかに向上している児童が多く見られた。

3 課題（成果）

日常の様子から、読み間違いが多い、文字を抜かして読んでしまう、読むまでに時間が掛かる児童が多いことから、読みを鍛えるための時間・活動が少ないことが課題と考える。

中学年分科会

3年生

1 実施したこと

3年生は、ステップ学習の時間を活用し、基本的な言語能力を確かめるため、MIM-PMに取り組んだ。また、国語の時間にMIMデジタルを活用したり、MIMのカードを用いて言葉のゲームを取り入れたりして言葉の理解を深めた。教室には、「言葉のたから箱」のポスターを掲示し、その言葉を使って作文や日記を書いた。

2 児童の実態

3年生はMIM-PMに取り組み、できる問題量が少しずつ増えてきた。実態としては、中央値に達する児童が27人中6人で、ほとんどの児童が下位層である。作文や日記を添削していると、拗音、促音や「て」「に」「を」「は」等の助詞の間違いが多々ある。そこで、国語の授業では、MIMカードを用いて、拗音、促音、助詞等の学習に取り組んだ。

3 課題（成果）

成果は、MIM-PMや拗音、促音ゲームに定期的に取り組んだことで、以前に比べると毎週の日記や日々のノートでの言葉の間違いが少なくなったことである。日々の学習で言葉を意識して書くことができるようになってきている。しかし、正しい言葉遣いを意識して取り組めるようになってきたものの、初めて読む文章を文節で区切ってすらすらと読むことや、拗音、促音、助詞を正しく使える児童はまだ半数しかいないことが課題である。

4年生

1 実施したこと

4年生は、3年生同様ステップ学習の時間を活用し、基本的な言語能力を確かめるため、MIM-PMに取り組んだ。また、言語理解を高めるために国語科の学習時に意味調べを取り入れ、言葉の意味を理解すると共に、国語辞典の扱いの習熟に努めた。

2 児童の実態

MIM-PMは4回実施し、その平均値を割り出したところ、A判定は32名中（1名未実施）5名（16%）であった。C判定が16名（50%）と半数もいた。1回目と4回目を比較してみるとA判定は2名から6名に増加し、C判定は20名から13名に減少した。

国語辞典を数多く使用することで、辞書を引く習慣が身に付き、どの意味が教科書の文章に当たるかを考えて引くようになった。

3 課題（成果）

成果としては、MIM-PMについては、一つのことを継続して取り組むことにより、思考がスムーズになり、児童が不安なく取り組めるようになった。国語辞書に関しても、調べる速度が速まってきた印象がある。

課題としては、下位層の人数が多いことがあげられる。基本的な言語理解に継続的に取り組んでいく必要がある。

高学年分科会

1 実施したこと

高学年分科会はステップ学習の時間を活用し、児童の読解力がどの程度身に付いているのか把握するためのアセスメントに取り組んだ。

【学習指導要領 C 読むこと 第5学年及び第6学年の内容】

事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること（説明的な文章）

登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること（文学的な

を踏まえ、上記の教材から12の内容を抜粋して実施した。

2 子どもの実態

全ての内容でA評価を得た児童の割合は、6年生が20名中7名（35%）、5年生が31名中4名（13%）であった。特に正答率の低かった内容は、「あらすじの理解」と「時間の流れをもたない説明文の理解」である。他教科の学習においても、問いの意図が読み取れないことで、内容が理解できない児童が多くみられる。

3 課題（成果）

上記の内容に課題がみられるということは、本校の児童は「文章全体の構成を捉えて要旨を把握する力」が不足しているということである。意欲的に読書に取り組む児童も少なく、日常生活から文章に触れる機会が少ないため、長文を最後まで読むことすら途中で投げ出してしまう児童が多い。そこで、6年生は3文程度の読解問題に毎日宿題として取り組んだ。徐々に力をつけていき、現在では10文程度の問題にも取り組んでおり、文章全体の構成を捉える力も身に付いてきている。今後は5年生も取り組ませ、継続的に文章に触れることで、読解力の向上を目指していきたい。

6 研究の成果と課題

児童の実態把握

児童の、日常の活動やアセスメント結果をもとに下記のような実態が分かってきた。

低学年では語彙が乏しく、指示の意味が理解できない場面がある。また、アセスメントの結果を見ると、下位層が半数以上に上っていた。

中学年では、拗音、促音、助詞の使い方ができていない児童が多くいた。また、アセスメントも低学年同様、下位層が半数ほどいた。

高学年では、アセスメントの結果を見ると、内容を読み取る力が乏しいことが分かった。

全体を通して、字に親しむ機会が乏しく、語彙が不十分なことにより内容がきちんと読み取れないことにつながると考えられる。

成果と課題

成果としては、語彙に関するアセスメントや活動に継続的に取り組み、表現する機会を増やすことで、徐々にではあるが、児童が意識的に読んだり書いたりできるようになってきた。

課題としては、低学年では、たくさんの言葉に触れ、語彙を増やすこと、中学年では、基本的な言語理解（拗音、促音、助詞等）の習得・表現、高学年では、長文を最後まで読み、構成を捉えて要旨を把握する力が不足していること等が挙げられる。